

空手道詳説（8）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略

（10）察度王の功績



沖縄に残る朝貢舟絵図

中山王の察度（1321～94年、在位1350～94年）は、父の奥間大親（おくまうふや）と天女（羽衣）の間に生まれた子という伝説が残るほど、とても英邁な王であった。

1372年に明国と朝貢関係が成立し、従属国として位置付けられる。進貢に伴って下賜された物資は、帰国後高値で取引され財政的な潤いをもたらすとともに、それまで閉ざされた世界にあった琉球にとって、文化的にも刮目（かつもく）に値する大いなる刺激を受け、一気に先進文明に目開く先行きの明るさを感じたことであろう。

また、中には朝貢物以外の物資を搭載して利を稼ぐ便乗組も出たが、元来

が朝貢物資の運搬から帰国までの費用は原則として明国側の負担であったため、明は進貢船による公的な物流以外は認めない方針を各国に伝達している。

アジア大方の国が明国の笠の中に入り、同様に仲間入りした琉球は、一気に視界が開ける転換期を迎えたのである。

察度の業績として大きく二つの事績が挙げられるが、察度は時宜を得た幸運児であったと言えるかもしれない。

第一には、1392年に家臣の中から3人を選び、勉学のため明の大学「国子監」へ留学生として送り出したことである。明側は、留学生の学費や生活費など一切を負担してこれに応えた。おそらく、琉球以外の国に対しても同様の措置をもって遇したのであろう。

この留学生のことを、「官生」（かんしょう）と称した。官生の派遣は、15世紀初期から後期に至る70年ばかり中断（「沖縄の歴史」宮城栄昌著、51頁）したが、以後は明治維新による琉球国解体（琉球藩、沖縄県の設置）まで約500年間続く。

官生経験者は、政治、学術、文化、経済、産業など、多方面にわたり大きな影響力をもって活躍する。中山の留学生派遣に倣い、間もなく南山も留学生を送るようになったが、先鞭をつけたのはやはり察度である。

第二には、官生派遣と同じ1392年に、察度が願望していた明人の移入である。

それは、洪武帝から進貢に対する下賜の形で、学術・技術に長けた人たちの移民が実現したのである。

明から下賜された移民とは、福建省出身の学者や職能集団で、人数にして約500名ばかりを移住させ、琉球国に帰化させた。

当時の明国は、世界史上に名だたる元を駆逐し、広大な国土を統治して東洋の覇権を握り、周辺各国に対しは、大らかで悠揚たる態度をもって外交や貿易に終始した様子を窺うことできる。

福建省沿岸部から来琉したのは閩人（びんじん）とって、この移民団を「閩人三十六姓帰化」とか、居住地名から「久米三十六姓帰化」と呼ばれた。以後は、単に「三十六姓帰化」と記す。

(11) 三十六姓帰化と拳法の伝来

三十六姓帰化をもう少し詳しく述べてみよう。まず、閩人とはビン語を話す漢族のことで、伝承や言語学的研究によれば、古来中原に居住していた漢民族の一種属が春秋時代（BC770～BC403年、中国古代時代区分の一つ）に南下し福建に至り、そこに定住して沿海民族となったもので、彼らは竜蛇の子孫だという自負から閩の字を用いた。閩越（びんえつ）も福建省の別名として使われる。

九州を離れて台湾まで、東シナ海を弧状に連なる奄美諸島や沖縄諸島は、海上交通や外交上、他国の関心を集めつつも鬱蒼たる原生林が繁り、マングローブに囲まれ容易に近寄りやすい条件にあったと想定される。その立地条件から、1297年の蒙古襲来から防衛し得たようにも思われる。したがって、長く外界との緊密な交流から



遠ざかってきた経過があるため、航海術に優れ、東南海洋沿岸諸国の事情に詳しい閩人の移住は、その後の歩みを大きく促進したのは歴史事実である。

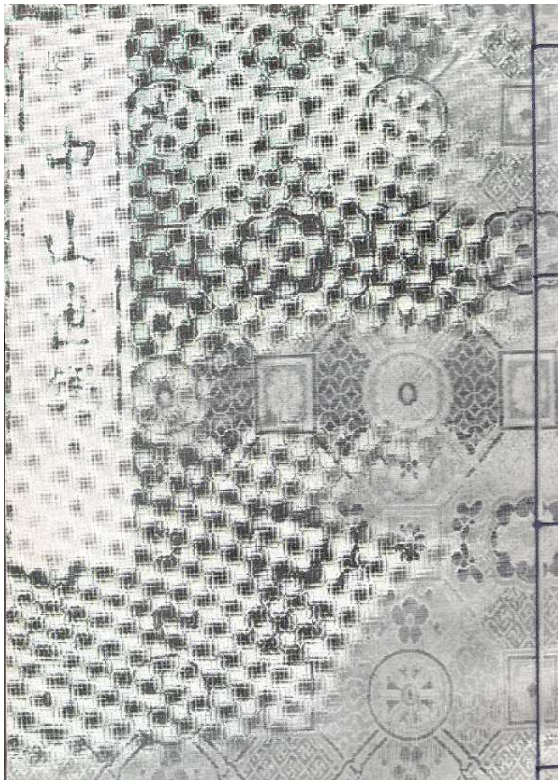
「三十六姓帰化」と呼称されたのは、この移民集団が三十六の姓（名字）を名乗る人たち（家系）によって構成されていた意味ではない。

数えて三十六種の姓を持つ集団であったというよりも、中国で三十六という数は、多数あるという意味で用いられる慣習があったせいかと推察される。

その慣習の影響を受けた日本においても、『兵法三十六計』、『三十六計、逃げるに如かず』、『三十六人衆』、『三十六歌仙』、『富岳三十六景』の用例がある。空手の場合なら、形の『三十六』（さんせーる一）である。「三十六姓帰化」は、名字の数で36との確証はなく、多くの名字という概数表現の可能性である。

因みに述べるなら、空手の形で『三十六』の以外に数字が付されているのは、『三戦』（さんちん）、『十三歩』（せーさん）、『十六』（糸東流にある）、『十八歩』（せーぱい）、『二十四歩』（にーせーしー）、『二十八歩』（にーぱいぽー）、『五十四歩』（うーせーしー）、『壹百零八歩』（すーぱーりんぺい）又は『百歩連』（べっちゅーりん）などである。形と数字の関連や意味については、この項とは関係ないので別章で述べたい。

この移民団の中には、その後、福建に帰還したり、途絶した家系もあったと思われ、17世紀半ばで確認されているのは、蔡、鄭、林、梁、金5姓の家系だったと、「中山世鑑」は記している。



尚 巴 志 爲 山 南 王 其 政 法 於 先	環 無 往 不 復 時 則	世子 武 寧 王 立 不 明 也 天 運 循	察 度 王 在 位 四 十 六 年 薨	而已	存 者 僅 蔡 鄭 林 梁 金 五 家	矣 其 三 十 六 姓 凋 謝 今 所	太 祖 皇 帝 稱 琉 球 於 守 禮 之 邦
--	---------------------------------	--	--	----	--	--	--

上の写真左は筆者が所持する「中山世鑑」序章の表紙で、右は蔡、鄭、林、梁、金5姓の記述部分である。傍線は筆者が付した。

三十六姓帰化人は、那覇の久米村（くみそん。17世紀以降は「くにんだ」）に集団で住居を与えられて任務の遂行に当たり、琉球王に忠誠を誓い様々な情報を提供するとともに実務に携わり、新知識人として信望を集めたのである。

久米は、現在の那覇市「沖縄県庁」北西側に近く、当時は二つの河川によって隔てられ、浮島のようなようであったといわれている。現在も町名として残る。

帰化人たちは、実際に航海術や航路の水先案内人として、通事（通訳）や漢語の文書作成、外交、貿易などの業務に従事し、琉球が廃藩置県で沖縄県になるまでの約500年間、有意なる活動が続いていた。

帰化人たちは、自らのことを唐営と称していたが、後に唐栄に改めている。その中には、三司官（王府の実質的な最高責任者）に登用された者や、有能な政治家、学者、歴史編纂者を輩出し、官生として派遣される者も少なくなかった。

以上のことは、「中山世鑑」を論拠としているが、近頃の研究によれば違う見解もある。それは、「中山世鑑」それ自体が「古事記」や「日本書紀」と同様、国体側の史書であることを考慮に入れるなら、全て違わず正確かとの疑念は払拭できない。

帰化人たちは、琉球に儒教をもたらし、孔子廟を建て、王府の支配階級の道德観に影響を与えたが、一般民衆にまで儒教の思想浸透はなし得なかったのではと思われる。

更に、彼らは儒教、仏教と並ぶ中国三大宗教の一つである道教をもたらした。道教とは、漢民族の土着的・伝統的な宗教の一つで、中心概念の「道」

（たお）とは宇宙と人間の根源的な不滅の真理を指す。

「道」の字は「首」が始まりを、「辵」（しんにょう）が終わりを示すから、「道」の字自体が太極にある二元論的要素を表している。この「道」と一体

となる修行のため、道士（道教を信奉し、教義にしたがった活動を職業とする者）は不老不死の霊薬や丹を煉り、仙人となることを究極の理想とする宗教観である。

道教は、琉球の土着宗教である根神（にーがん。集落の旧家から出た神女）やノロ（ぬーる。女司祭）の宗教儀式に通じるところがあったせいも、容易に民衆の中に溶け込んだ可能性がある。

空手と三十六姓帰化人の関係について、帰化人の中に拳法に長けた家系があって、琉球の人たちに伝授したのが空手の始まりで、これが源流だという説がある。拳法に秀でて伝えたのは、蔡氏の家系であったと伝わる。



現代中国にある孔子廟の一つ

ところが、この説に対し三十六姓帰化があった時点で、既に琉球には「手」（ていー）と呼ばれる武器武具を用いない徒手空拳の格闘技術が存在していたとするのが、もう一つの説である。

現在の沖縄県において、これら空手の始まりに関する記述や記録は存在していない。琉球に漢字が伝来したのは1260年以降（英祖王の時代）と推定されるが、その使用は王府を中心とする支配階級であった。

このワンポイントレッスン25年11月号で書いたように、文学書の編集が1531年の「おもろさうし」が最初であり、史書の編纂は1650年の「中山世譜」が嚆矢であるように、世の推移や文化・文明などの事象を時系列に記録するという考えそのものと、機会が極めて僅少であったことが影響し、空手（拳法）の出発点に関してはせいぜい口碑として残る程度である。しかも、時代が隔たり過ぎている。

加えて、後に述べる「琉球処分」による混乱期を経ていることと、今次太平洋戦争の戦火による記録財産の損失も計り知れないものがある。

現在に伝わる空手は、三十六姓帰化人が伝えたのが始まりなのか、あるいは1392年の三十六姓帰化人が来琉以前から「手」（ていー）が存在し、一部の人たちによって伝承されていたのか。

考えてみれば、今から620余年前に遡る空手のルーツ探りである。

もう少し沖縄史を述べた後に、筆者は今まで接してきた見聞によって、空手の源流探りをしてみたいと考えている。

620年前に想像を巡らし、あれこれ古きを探索すること自体、筆者自身は果てしないロマンを感じて仕方がない。

（つづく）

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月初版、日本放送出版協会発行

新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月初版、株勁草書房発行

「中山世鑑序」複製、編集・沖縄県教育庁文化課、昭和57年10月15日発行